

全国大学書道学会

会報

33

令和7年(2025)
2月1日発行
全国大学書道学会

新生・全国大学書道学会

副理事長 小川博章

新しい年を迎え、会員の皆様におかれましてはご活躍の毎日かと思えます。昨年は全国大学書道学会福岡大会も盛会に開催され実り多い大会であったことは喜ばしい限りです。開催校や役員、発表者の努力の賜と思いますが、数年前は私達の努力のみでは解決できないことばかりであったことが思いおこされます。コロナ禍のために大会が中止に追い込まれたり、様々な対応を強要されての活動であったりしたことが苦しく懐かしく思い出されます。

活動においても運営においても思うにまかせぬ事ばかりではありましたが、マイナスマ面に向かいあうことで多くのことを学んだ時期でもありました。本会でもZOOMをはじめとした遠隔会議を活用し、対面が難しい場合も時と場所の垣根をクリアする運営を行ってまいりました。おそらく会員の方々も遠隔授業の知見を広め有効活用されている実態があるかと思われまます。コロナ禍の大変な期間に、必要に迫られて各教員が授業のオンデマンドライブラリーを充実させる機会となったという話も聞こえてきます。緩い環境では怠惰に流れがちですが、困難に出会うことでレベルアップを実現したといえるでしょう。

本学会においても遠隔会議を活用するだけでなく、学会の組織や事務内容を改善し充実させていることは、会報三二一号で永由理事長が述べた通りです。業務内容を精査して、より公平で無駄の無い作業工程を作成するなどして、よりレベルの高い活動を目指しています。また、コロナの弊害は世界的

なものだっただけに国際的な芸術交流や学術交流も停滞したことは否めません。本学会はこれまでも国内的な活動により書学や芸術の発展を担ってきた面が多いかと思いますが、国際的な研修を始めたばかりの時期で、国際的な視野の重要性に気付いた頃とコロナ禍の終りが同時期に訪れたといえるかと思えます。三月に予定されている台湾での国際学術交流は新しい展開が期待されるとともに、私達がイメージしている「書道」が他の国では同じように扱われているのかどうかを確認する機会ともなるでしょうし、書道を学問の一分野として捉えているか否かも確認することができると思われます。私達が認識している学術的なコンプライアンスも共通のものか否かを確認する機会となるかもしれません。

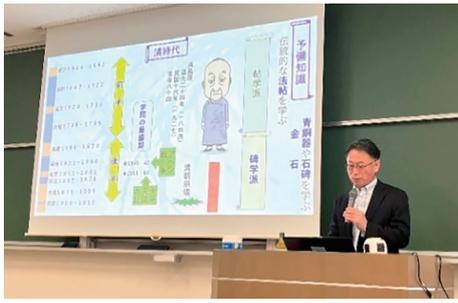
国際的な企画だけでなく、国内的な企画についても本学会では近いうちに「良寛を巡る旅」を計画していると仄聞しております。国際的な視野を広げること、却って日本のすばらしさを発見する機会になるのではないかと期待するところです。これまでも新潟の地は本学会でも重要な土地柄ですから、そうした面でも期待は高まると思います。ある著名な方が「コロナの効用は、金の無駄使いが減ったことと内省する時を得たことだ」と語っていましたが、本学会においても内省、自省と国内の研修企画と結びつくことを願っております。

コロナ禍のような困難な時期を経過することで、さらに大きく変化し、内容の充実に務めてまいりました全国書道学会は会員の方々の活動を応援する立場を強化したいと考えております。



令和六年度（福岡）大会を終えて

福岡教育大学 和田圭壮
服部一啓



令和六年九月二十一日、福岡教育大学において、「全国大学書道学会福岡大会」が開催されました。昨年度の東京大会の立地の良さに比べ、本学が位置するのは、福岡県の中でも、福岡市と北九州市のちょうど中間地点、緑豊かな田園風景に囲まれた田舎にあります。宿泊施設が近郊にないことから、お越しいただいた先生方には、お時間を頂戴する事になったり、周辺に食事できるお店がなかったりと、誠に不便をおかけいたしました。申し訳ございませんでした。そうした環境にあっても、当日は、会員五十九名、準会員十一名、計七十名の方にご参加いただきまして、当日の学会を盛り上げていただきました。本学の公開講座等の実施に際し、県内の先生方が来られるのにも、不便であると苦情がある中、県外から遠方よりお越しいただいた先生方には、感謝の念を禁じ得ません。このように盛会となったのは、何よりも、近年に比べて、ご発表いただいた方が多く、十一件もの研究発表があったことによるものが大きかったと存じます。ご発表いただいた先生方、誠にありがとうございました。分科会が二つとなり、中国書道史、日本書道史、書道理論等、様々な分野からの研究発表があり、活発に質疑応答がなされました。横田会長、永由理事長をはじめ、事務局の皆様の日頃からのご尽力のお陰によりまして、盛会裏に終わったことと存じます。誠にありがとうございました。

さて、研究発表の後、大会記念講演として、九州国立博物館長の富田淳先生に「呉昌碩のまなざし——最後の文人と師友たち——」と題したご講演



をいただきました。令和六年、東京国立博物館を中心とした事業「生誕一八〇年記念 呉昌碩の世界」が四館同時期に開催されたところで、呉昌碩の書画や印譜を示され、作風の変遷をたどりながら、師友や弟子に注目し「金石の交わり」の中で築かれた呉昌碩の世界を語っていただきました。聴講者の皆様からは、「時機を得たお話にとっても感銘を受けた」というご感想が多く聞かれ大好評でした。

九月二十日から二十二日までは、福岡教育大学キャンパス内の「学生会館」を会場に、六十三名の方の出品を得まして「令和六年度全国大学書道学会会員書作展」を開催しました。会員の皆様のバラエティーに富んだ作品を拝観できる貴重な機会で、三学会の会期中の来場者や学生たちも鑑賞して楽しませていただきました。併せて特別展示として、本学書道分野が収蔵する書跡の中から、中国書人の書軸七点（王鐸、陳介祺、俞樾、楊守敬、羅振玉、王昶、鄧散木）を出陳しました。ガラスを隔てずに作品の妙趣を直に鑑賞することができたと好評でした。キャンパス内とは言え、離れた場所での書展開催となり、設備等の不備に加え高低差の大きい構内の移動等でご不便をおかけいたしました。

また、本学会終了後には、令和元年の鳥取大会以来五年ぶりに、三学会合同懇親会が、学内の生協レストランにおいて開催されました。コロナ禍で開催することができなかつた五年分の懇親の思いを晴らすかのようになり、参加された皆様の笑顔が印象的な、楽しい会となりました。

準備から学会当日に至るまで、いたらない点が多々あったかと存じますが、皆様のご厚情とご協力により、無事終了しました。関係各位に感謝を申しあげ、報告とさせていただきます。



全国大学書道学会 令和6(2024)年度 福岡大会 次第

開催日 令和6(2024)年9月21日(土)
 大会会場 福岡教育大学教育学部
 開催大学 福岡教育大学

《開会式・総会》

- 9:00 受付(参加費3,000円*準会員(大学院生)は2,000円)
- 9:30~10:20 開会式・総会(特I教室)

1. 開会のことば		
2. 開催大学あいさつ	福岡教育大学	和田 圭壮 先生
3. 会長あいさつ		横田 恭三(跡見学園女子大学)
4. 理事長あいさつ		永由 徳夫(群馬大学)
* 議長選出		瀬筒 寛之(鹿児島大学)
5. 議事		
(審議事項)		
1) 令和5年度事業報告	→ 資料1	杉山 勇人(鎌倉女子大学)
2) 令和5年度決算報告	→ 資料2	尾川 明穂(筑波大学)
3) 令和5年度監査報告		中村 史朗(滋賀大学)
4) 令和6年度事業計画(案)	→ 資料3	杉山 勇人(鎌倉女子大学)
5) 令和6年度予算(案)	→ 資料4	尾川 明穂(筑波大学)
6) 国際学術交流専門委員会について		下田 章平(相模女子大学)
(報告事項)		
1) [会員・準会員に関する内規]改定	→ 資料5	永由 徳夫(群馬大学)
2) [学会賞に関する規程]設置	→ 資料6	永由 徳夫(群馬大学)
3) 『大学書道研究』第17号について		角田 勝久(新潟大学)
4) 『大学書道研究』の各種規程の新設・改定	→ 資料7	下田 章平(相模女子大学)
5) 『大学書道研究』のデジタル公開について	→ 資料8	草津 祐介(東京学芸大学)
6) その他		
6. その他		
1) 新入会員紹介		
2) 次年度開催大学あいさつ	信州大学	小林 比出代 先生
3) その他		
7. 閉会のことば		

《研究発表》

- 10:30~12:10 研究発表/午前の部 第1分科会(会場:特I教室) 司会:角田 勝久(新潟大学)
- 10:30~11:00 研究発表 午前1-①
 書表現セラピーの理論と展望 — 芸術療法を起点として —
 四国大学大学院文学研究科 高嶋 良子
- 11:05~11:35 研究発表 午前1-②
 昭和初期における上田桑鳩の芸術論と術語解釈
 東京藝術大学専門研究員 柳田 さやか
- 11:40~12:10 研究発表 午前1-③
 「小島切齋宮女御集」の配列について
 書文化研究会会員 染谷 慶子
- 10:30~12:10 研究発表/午前の部 第2分科会(会場:特II教室) 司会:尾川 明穂(筑波大学)
- 10:30~11:00 研究発表 午前2-①
 王鐸の臨帖における脱字の発生傾向と要因に関する研究
 東京学芸大学教職大学院 阿部 ゆう
- 11:05~11:35 研究発表 午前2-②
 歴史家・陳垣の書道に対する所見の考察 — 書作の態度と北京における立ち位置について —
 相模女子大学非常勤講師 早川 桂央
- 11:40~12:10 研究発表 午前2-③
 蘭亭序神龍半印本の再検討 — 破筆などから推測する空野の存在 —
 四国大学大学院文学研究科 馮 琳凱
 四国大学書道文化学科教授 太田 剛

- 13:10～14:50 研究発表／午後の部 第1分科会(会場:特I教室) 司会:山口 恭子(法政大学)
 13:10～13:40 研究発表 午後1-④
 博文堂関連書簡に見る山本二峯の収蔵活動について
 相模女子大学准教授 下田 章平
- 13:45～14:15 研究発表 午後1-⑤
 日本中世における年中行事「書き初め」の成立過程
 鎌倉女子大学短期大学部教授 杉山 勇人
- 14:20～14:50 研究発表 午後1-⑥
 近代における「撥鑑法」に対する解釈の変容
 群馬大学教授 永由 徳夫
- 13:10～14:15 研究発表／午後の部 第2分科会(会場:特II教室) 司会:草津 祐介(東京学芸大学)
 13:10～13:40 研究発表 午後2-④
 「童」字に関する考察 ～珍篋銘文中の「童」字を例として～
 九州女子大学准教授 古木 誠彦
- 13:45～14:15 研究発表 午後2-⑤
 書画同源より鑑みる陰陽二元論
 高野山大学文学部密教学科教授 野田 悟
- 《大会記念講演》
 ● 15:00～16:20 大会記念講演(会場:特I教室) 司会:藤森 大雅(大東文化大学)
 演題:呉昌碩のまなざし ―最後の文人と師友たち―
 講師:九州国立博物館長 富田 淳先生

《会員書作展》

※本年度の会員書作展の作品は、福岡大会(2024年9月)での展示の後、台湾との学術交流・書作展(2025年3月)にも展示いたします。

- (1)会 期 令和6年9月20日(金)～9月22日(日)9:00～18:00(最終日は17:00まで)
 (2)会 場 福岡教育大学学生会館内大集会室(〒811-4148福岡県宗像市赤間文教町1-1)
 (3)特別展示 福岡教育大学書道専攻収蔵 王鐸・楊守敬・羅振玉等の作品も展示します。

《理事会》

日 時 9月15日(日) 19:00～20:30 【オンライン開催】

《総会資料》

資料1 令和5(2023)年度事業報告 → 承認

(令和5年)

- 5月28日……………第1回 理事会(オンライン)
 6月1日……………『大学書道研究』第16号、会報第30号(東京大会1次案内)等、発送
 7月15日……………常任理事会
 7月15日……………三学会合同役員会
 8月24日……………大会要項(東京大会2次案内)等、発送
 8月31日……………学会誌論文投稿申込締切日
 9月10日……………第2回 理事会(オンライン)
 9月13日～20日 ……会員書作展(文京区立大塚地域活動センター)
 9月15日～17日 ……書道三学会・東京大会
 11月10日……………『大学書道研究』投稿論文受付締切日、学会誌投稿論文査読(11月下旬～)
 12月23日……………学術委員会・常任理事会
 12月27日～30日 ……全国大学書道学会創立65周年記念企画 台湾研修旅行

(令和6年)

- 1月～3月……………『大学書道研究』編集
 3月17日……………常任理事会
 3月17日……………三学会合同役員会(本年度学会運営について、令和6年度大会について)
 3月24日……………第1回 国際学術交流専門委員会

資料2 令和5(2023)年度会計報告(2023.04.01~2024.03.31) → 承認

A: 収入の部		
1	2022年度繰越金	8,366,546円
2	2023年度会費(237口)	1,514,000円
3	『書の古典と理論』印税	253,660円
4	雑収入	
	会員書作展協賛費残金	179,200円
	大会運営補助費残金	48,623円
	預金利子等	3,401円
合 計		10,365,430円
B: 支出の部		
1	大会運営補助費・謝金	320,000円
2	理事会費(会議費・交通費)	298,474円
3	印刷費(学会誌16号350,175円、会報30号93,773円、 会報31号248,193円、封筒3500枚83,600円)	775,741円
4	通信費	54,564円
5	事務費(消耗品費、振替口座手数料40,912円等)	51,396円
6	東洋学・アジア研究連絡協議会費	2,000円
7	ホームページ保守・更新費	259,160円
8	諸行事の開催・準備費等	270,536円
9	雑費(慶弔費)	0円
合 計		2,031,871円
● A - B (10,365,430円 - 2,031,871円) = 8,333,559円 (前年度比 - 32,987円)		
上記の通り報告いたします。 令和6年6月21日 会計局 尾川 明穂 ㊟		
以上相違ありません。 令和6年6月21日 監 査 中村 史朗 ㊟		
同 同 山口 恭子 ㊟		

資料3 令和6(2024)年度事業計画(案) → 承認

(令和6年)	
4月27日	……常任理事会
4月27日	……第2回 国際学術交流専門委員会
5月12日	……第1回 理事会(オンライン)
6月1日	……会報第32号(福岡大会1次案内)等発送
7月13日	……常任理事会
7月13日	……三学会合同役員会(福岡大会打ち合わせ)
8月24日	……令和6年度福岡大会第2次案内発送
9月1日	……『大学書道研究』第17号発送
9月15日	……第2回 理事会(オンライン)
9月20日~22日	……書道三学会・福岡大会
9月20日~22日	……会員書作展(福岡教育大学学生会館内大集会室)
11月30日	……学会誌論文投稿申込締切日
12月上旬	……常任理事会
(令和7年)	
2月3日	……『大学書道研究』投稿論文受付締切日、学会誌投稿論文査読開始
3月中旬	……常任理事会/三学会合同役員会(本年度学会運営について、令和7年度大会について)
3月27日~3月30日	……第1回 国際学術交流(台湾)

資料4 令和6(2024)年度予算(案)(2024.04.01～2025.03.31) → 承認

A： 収入の部	
1 2023年度繰越金	8,333,559円
2 2024年度会費(一般210口、学生10口、計220口)	1,310,000円
3 『書の古典と理論』印税	250,000円
4 雑収入(預金利息等)	5円
合 計	9,893,564円
B： 支出の部	
1 福岡大会運営補助費・謝金	170,000円
2 理事会費(会議費・交通費)	300,000円
3 印刷費(学会誌17号、会報32・33号)	600,000円
4 通信費	100,000円
5 事務費(消耗品費・振替手数料)	150,000円
6 東洋学・アジア研究連絡協議会費	2,000円
7 ホームページ更新費	0円
8 諸行事の開催・準備費等	800,000円
9 予備費	7,771,564円
合 計	9,893,564円

資料5 〔会員・準会員に関する内規〕改定

(下線部は変更箇所)

〔会員・準会員に関する規程〕

- (1) 会費の未納が、三ヶ年に及ぶときは、会員としての資格を失う。会員資格を喪失した者が、再入会を希望する場合は、滞納年度分の会費を納め、常任理事会の承認を経なければならない。
- (2) 準会員(大学院生)が、大学院生でなくなったときは、準会員としての資格を失う。ただし、届出によって会員として資格を継続することができる。
- (3) 本会の名誉を毀損し、会員として不適当と認められる者については、理事会の議を経て除名もしくは資格停止等の処分を行うことができる。

資料6 〔学会賞に関する規程〕新設について**〔学会賞に関する規程〕**

(名称)

1. 本学会に、学会賞として全国大学書道学会学術賞(以下「学術賞」)、全国大学書道学会功労賞(以下「功労賞」)、を設ける。

(対象)

2. 前条の各賞対象者は、原則として本学会会員個人または団体であって、以下の各号の条件を満たす者とする。
 - (1) 学術賞は、本学会誌を中心に当該分野において継続的な研究実績がある者、または本学会の目的分野において優れた研究成果を挙げ、顕著な功績が認められる者。
 - (2) 功労賞は、本学会の発展に顕著な功績のあった者、または本学会関連分野において国内的あるいは国際的に榮譽を受けた者。

(選考方法)

3. 選考は、学会賞選考委員会がこれにあたり、理事会において決定する。

(表彰)

4. 表彰は総会において行い、賞状及び副賞を贈る。

資料7 『大学書道研究』の投稿規程、執筆要領について（学術局）

※本会報19ページ、および全国大学書道学会ウェブサイト (<https://all-shodo.jp>) をご参照ください。

資料8 『大学書道研究』のデジタル公開について（編集局）

編集局では、本学会規約にも記載されている書道の研究の発展と教育への貢献を進めるために、学会誌『大学書道研究』のさらなる利用促進を図るべく、収録された研究論文、研究ノート等をインターネット上で無償公開を進めていきたいと思っております。

『大学書道研究』の電子無償公開が進むことにより、『大学書道研究』掲載論文が広く参照され、本学会誌の学術的価値の向上、更には斯界が発展する一助となればと思っております。

1. デジタル公開の範囲

当面は、2008年発行の『大学書道研究』第1号以降を対象とする。

2. デジタル公開のスケジュール（予定）

（9月15日（日） 常任理事会での審議）

（9月15日（日） 理事会での審議）

9月21日（土） 総会での報告

年内 公開サイトおよび公開手続きを委託する業者の選定。

→次回の常任理事会での審議。

◆第18号以降については、『大学書道研究』の発行後に逐次デジタル公開を進める。

◆第1号から第17号については、執筆者への著作権譲渡についての連絡を進め、2025年度以降のデジタル公開を計画する。

◆第17号以前で不掲載を希望する方、最終的に連絡がつかない方、連絡先が分からない方については、書誌情報のみ掲載とする。また、著作権上、デジタル公開できないものについては、個別に対応したうえでデジタル公開する。

会員の異動（新入会員・準会員／退会・退会申出者） ※2023.09～2024.08の会員の異動

《会 員》

沈 伯陽	東京中央オークション書画部	推薦者：下田 章平
久保 彩織	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校	推薦者：加藤 泰弘
平倉 和則	東京女子大学	
滑田 一輝	相模女子大学	
上野あゆみ	(株)佐電工	推薦者：小川 博章
舟引 遥香	京都教育大学	
山田 由美	公益財団法人日本習字教育財団	推薦者：志民 和儀
松尾 大輔	二松学舎大学	

《準会員》

西村 美咲	四国大学大学院修士課程	推薦者：太田 剛
神田めぐみ	東京学芸大学教職大学院	推薦者：加藤 泰弘
山本 桜子	群馬大学教職大学院	推薦者：永由 徳夫
毛塚 涼斗	東京学芸大学教職大学院	推薦者：草津 祐介
小磯 明照	東京学芸大学教職大学院	推薦者：石井 健
馮 琳凱	四国大学大学院	推薦者：太田 剛

《退会・退会申出者》

森岡 隆	浦 有希	岡島 正秀	雨宮 千春	塩出 智代美	淡海書道文化専門学校
利光亜希子	水木 亮子				

大会記念講演・富田淳「呉昌碩のまなざし」 —最後の文人と師友たち—のご報告

大東文化大学 藤森大雅

第六十六回令和六年度(福岡)大会の記念講演は、九州国立博物館長の富田淳先生を招聘し、「呉昌碩のまなざし—最後の文人と師友たち—」というタイトルでご講演いただきました。

富田淳先生は、筑波大学大学院博士課程を経て、一九九〇年に東京国立博物館研究員となり、その後、学芸研究部長、学芸企画部長を経て、現在は九州国立博物館長として勤務されています。その間、多くの特別展、企画展示に携わり、著書、論文も多数あります。

今回の講演は、連携企画「生誕一八〇年記念 呉昌碩の世界」に携わって得られた知見をもとに、呉昌碩の生涯と、呉昌碩と関わりが深かった人物達との交流を中心に、呉昌碩の文人像についてお話をいただきました。

はじめに、呉昌碩の生涯を三期に分けて概観しました。第一期は、太平天国の乱による凄惨な避難生活や混乱と貧困に苦しみながらも、書の大家に学び、見識を広めた安吉時代(一〜三八歳)。第二期は、詩書画印を介して意気投合した楊峴にあらゆることを学び、職業文人としての決意表明をした蘇州・杭州・上海時代(三九〜六七歳)。第三期は、昌碩と名を改め、西泠印社の社長に就任し、芸苑の領袖となった上海時代(六八〜八四歳)です。

続いて、呉昌碩と関わりがあった人物について、作品や文献史料を交えて説明をいただきました。紙幅の都合上、特に印象に残った人物について紹介します。最晩年の呉昌碩と交流があった吉井民三郎のコレクションには、呉昌碩の八〇歳を祝う会のインビテーションや、呉昌碩の訃告といった珍品があり、特に後者は清朝の伝統が垣間見える稀少な資料として紹介されました。その他、呉昌碩追悼記念会が催された際の関連の品々や、その講演会の記録も確認できるそうです。

楊峴は呉昌碩よりも二五歳年長者で親子のような関係にあった人物です

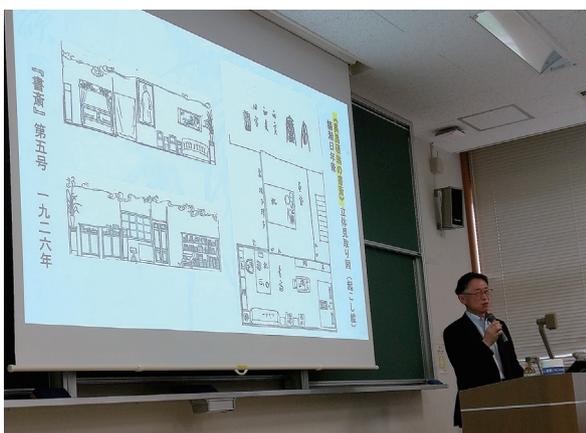
が、呉昌碩に依頼された詩文の添削には、直接書き込まず別紙に書いて貼り付ける手間をかけており、呉昌碩に対する敬意が感じられると富田先生は指摘されました。また、呉昌碩の竹の画に書き付けられた楊峴の讚には呉昌碩をバックアップする趣旨の内容が記され、楊峴が呉昌碩に宛てた別の尺牘には、思わず胸が熱くなるようなアドバイスが書かれており、二人の関係性を理解できる資料の紹介もありました。また、呉昌碩を日下部鳴鶴と引き合わせたのも楊峴で、これを機に鳴鶴は呉昌碩に印を刻してもらい、その印が日本に呉昌碩の名を広める一つの契機となったことを示されました。

硯のコレクターとして知られる沈石友は呉昌碩と若い頃からの知り合いでした。ある時、黄道周の書の跋文を依頼された呉昌碩は、沈石友に代作を依頼する手紙を送っており、それを揮毫した作品も紹介いただきました。また、有名な「西泠印社記」の文章も沈石友の代作であることから、いかに呉昌碩が沈石友の学識の高さを認めていたかが窺えるエピソードでした。

最後に、文人とは「高邁な精神を持つ」「古典に通じ、文章をよくする知識人」「心を翰墨に留める」と富田先生は定義されました。これを踏まえて呉昌碩は官僚文人寄りの職業文人と位置付けられました。多作を強いられ、類型化した作品があるものの、それまでにない独自性、文人性が認められ、かつ知識人が目標とする科挙が廃止される時代に行きあわせた呉昌碩こそ、最後の文人と言えるのではないかと締めくくられました。

今回のご講演を拝聴し、富田先生の研究の緻密さ、正確さは当然のこと、時代を俯瞰して捉える視点にこれまでの研究の積み重ねを感じました。

改めて、ご講演いただいた富田淳先生に御礼申し上げます。



令和六年度 全国大学書道学会会員書作展

開催日：令和六（二〇二四）年 九月二十日（金）～二十一日（日）
会場：福岡教育大学 学生会館（二階 大集会室）

1 一筋縄 塚本 宏（和洋女子大学名誉教授）



2 新秋 岡野屋 宏一（東京外国語大学）



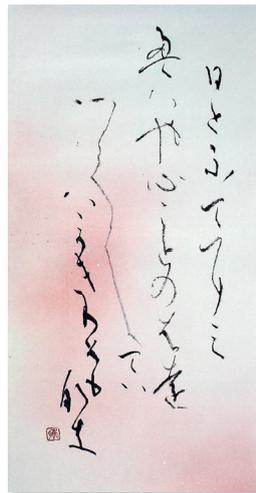
3 康能四或 森上 洋光（四国大学）



4 蘇軾詩句 小西 憲一（香川大学）



5 宗祇の歌 神戸 雅史（千葉日本大学第一中学・高等学校）



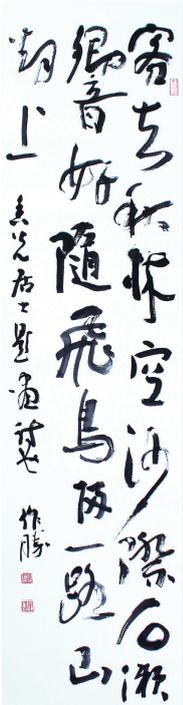
6 林木林の句（自由律） 廣瀬 裕之（武蔵野大学）



7 時田則雄のうた 土井 伸也（北海道教育大学岩見沢校）



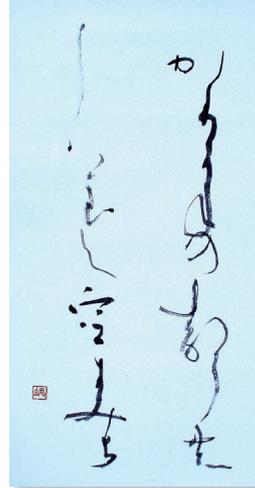
8 董其昌題画詩 劉 作勝（愛知学院大学）



9 臨甲骨文(神線作品) 神野 雄二(熊本大学名誉教授)



10 雁の声 八卷 敏幸(大阪樟蔭女子大学)



11 虚心 足立 敦子(相模女子大学)



13 舟 本田 容子(鎌倉女子大学)



12 持明院短冊ちらしより紫式部のうた 福原 真子(総合研究大学院大学(博士))



14 篠原鳳作の句 井田 明宏(安田女子大学)



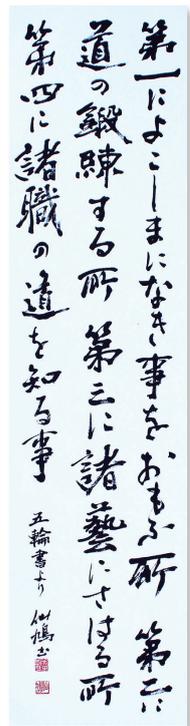
15 亀田鵬齋詩「望富嶽」 亀田 絵里香(日本大学)



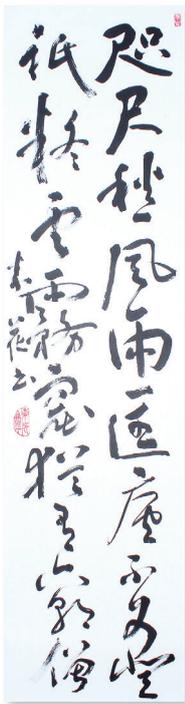
16 蓮 樋口 咲子(千葉大学)



17 「五輪書」より 太田 剛(四国大学)



18 銭起「江行無題」 増田 尚子(東京大学教育学部附属中等教育学校)



19 共鳴 西川 竜矢 (北海道教育大学旭川校)



20 養銳 藤森 大雅 (大東文化大学)



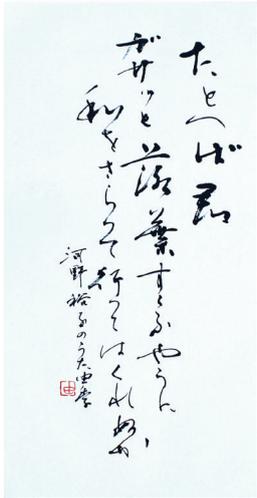
22 「李白一斗詩百篇」(「飲中八仙歌」より) 小林 比出代 (信州大学)



21 風月同天 出野 文莉(張莉) (大阪教育大学)



23 たとへば君 (河野裕子のうた) 山下 由季 (日本大学)



24 長相思 柿木原 くみ (相模女子大学名誉教授)



25 和氣致祥 平倉 和則 (東京女子大学)



26 初一念 森 哲之 (広島文教大学)



27 陸凱「贈范曄」 関 俊史 (二松学舎大学)



28 昇龍 野中 浩俊 (新潟大学名誉教授)



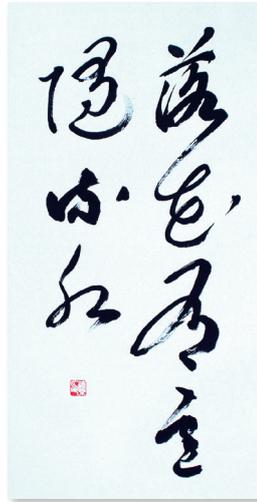
29 篆書七言春聯 横田 恭三 (跡見学園女子大学)



30 人知立 草津 祐介 (東京学芸大学)



31 落花有意 徳泉 さち (日本大学)



32 道 湯川 恵子 (NHK学園)



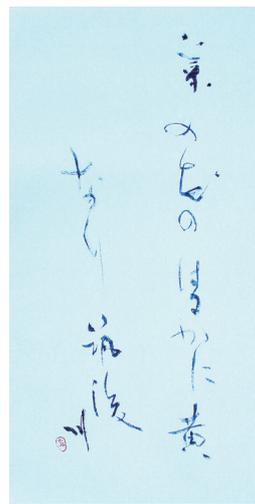
33 種田山頭火の俳句 石井 健 (東京学芸大学)



34 芭蕉句「こゑすみて」 熊坂 尚史 (巢鴨中・高等学校)



35 筑後川 蒲池 真純 (NHK学園高等学校)



36 雲籠残照雨鳴沙 田中 秀征 (徳島県立城東高等学校)

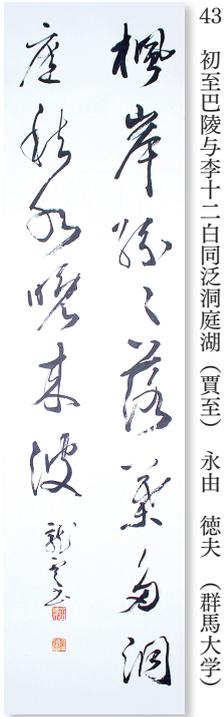


37 夏と秋の月の歌 齋木 久美 (茨城大学)



38 曹操 短歌行一節 早川 桂央 (相模女子大学)

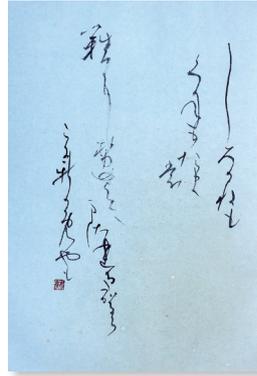




43 初至巴陵与李十二白同泛洞庭湖（賈至） 永由 徳夫（群馬大学）



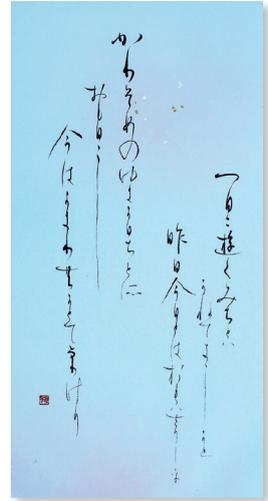
42 ほのぼのと：清水秀（比庵）一九六六年詠進歌
三井 忠大（一般財団法人陽山美術館）



40 山上憶良の歌 染谷 慶子
（書文化研究会）



41 原石鼎の句 真弓 幹子（香蘭女学校）



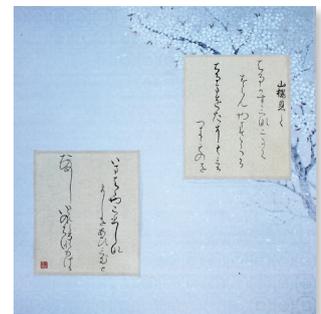
39 和歌二種 松原 直也（東京学芸大学大学院（博士課程））



48 白居易詩 松尾 治（専修大学）



47 千山萬水 津村 幸恵（都留文科大学）



44 臨「升色紙」 山本 桜子
（群馬大学教職大学院）



46 龍騰 押野 加奈
（東京学芸大学附属国際中等教育学校）



45 仁者寿 内山 裕美（早稲田大学）



53 萬世法 服部 一啓 (福岡教育大学)



52 漢金文五種 小川 博章 (淑徳大学)



51 風月同天 角田 勝久 (新潟大学)



49 風静書窗月滿樓 城間 圭太 (東京学芸大学)



50 香萱 のり子 (奈良教育大学)



58 吉田天祐「山寺観楓」の一節 下田 章平 (相模女子大学)



57 遊蝶花 松本 貴子 (大東文化大学)



56 「莊子」機心寓話 杉山 勇人 (鎌倉女子大学短期大学部)



55 鉄牛出門 岡村 浩 (新潟大学)



54 尽誠 和田 圭壮 (福岡教育大学)



63 精義入神 見城 正訓 (静岡大学)



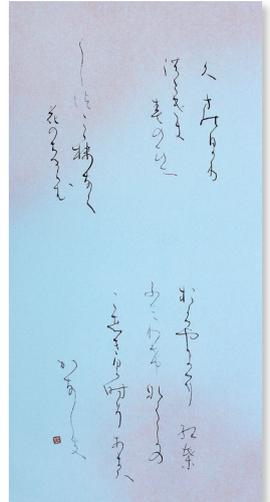
62 そのさきに 豊口 和士 (文教大学)



61 子規の句 久保 彩織 (横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校)



60 出土の碑 荒金 治 (大分県立別府鶴見丘高等学校)



59 新古今和歌集より 柳田 さやか (東京藝術大学)



福岡大会
会員書作展



福岡大会特別展示
福岡教育大学書道専攻収蔵作品

二〇二四年度 全国大学書道学会 会員・準会員一覽

相川 匡也	栃木県	栃木県	大野 幸子	埼玉県	衣川 彰人	愛知県	愛知教育大学	沈 伯陽	東京都	東京中央オークション
青木 馨子	東京都	元武蔵野大学	大橋 修一	埼玉県	木村 博昭	愛知県	愛知教育大学	神野 雄二	東京都	熊本大学名誉教授
青木 辰樹	埼玉県	県立羽生高等学校	大森 アユミ	福岡県	木村 亮太	群馬県	川場村立川場小学校	水田 至摩子	東京都	皇山記念館
青戸 貴子	鳥取県	米子市美術館	岡崎 忍	神奈川県	清兼 孝生	北海道	元北海学園大学	杉浦 妙子	東京都	二松学舎大学
青山 浩之	神奈川県	横浜国立大学	岡田 直樹	大阪府	金 貴粉	東京都	国立ハンセン病資料館	杉崎 哲子	静岡県	静岡大学
秋山 恵子	長野県	長野県	岡野屋 宏一	東京都	久保 彩織	神奈川県	横浜国立大学	杉山 勇人	神奈川県	鎌倉女子大学
浅井 陽子	埼玉県	星野学園小学校	尾川 明穂	茨城県	久保田 陽子	岩手県	岩手大学	鈴木 清	香川県	長崎大学
浅野 多鶴	岐阜県	愛知学院大学	岡村 浩	新潟県	草津 祐介	東京都	東京学芸大学	鈴木 慶子	長崎県	長崎大学
網代 菜摘	神奈川県	昭和女子大学附属昭和高等学校	小川 崇	埼玉県	熊坂 尚史	東京都	東京学芸大学	砂川 さつき	福岡県	岐阜女子大学
足立 敦子	茨城県	相模女子大学	小川 貴史	新潟県	黒田 悟史	埼玉県	東京学芸大学	関 俊史	東京都	二松学舎大学
阿部 ゆう	東京都	東京学芸大学教職大学院	小川 博章	東京都	芸術新聞社	東京都	東京学芸大学	関 俊史	東京都	鹿兒島大学
荒井 一浩	東京都	東京学芸大学附属高等学校	小川 秀樹	新潟県	毛塚 涼斗	東京都	東京学芸大学教職大学院	瀬筒 寛之	東京都	鹿兒島大学
荒金 治	大分県	大分県立別府鶴見丘高等学校	押木 加奈	東京都	小磯 明照	東京都	東京学芸大学教職大学院	瀬筒 寛之	東京都	鹿兒島大学
安生 成美	茨城県	県立八千代高等学校	押野 加奈	東京都	小磯 明照	静岡県	静岡大学	芹澤 麻美子	埼玉県	千葉大学教育学部附属小学校
五十嵐 ももこ	神奈川県	都立世田谷総合高等学校	落石 園美	東京都	見城 正訓	福岡県	九州女子大学	染谷 慶子	埼玉県	書文化研究会
五十嵐 康子	神奈川県	麻布学園	小野寺 東史	宮城県	古木 誠彦	愛知県	愛知淑徳大学	染谷 慶子	埼玉県	船橋市東図書館
池田 孝一	千葉県	志学館高等学校	笠嶋 忠幸	東京都	小坂 克子	岡山県	岡山明誠学院高等学校	高木 厚人	千葉県	大東文化大学
池田 利廣	奈良県	大阪教育大学	加藤 泰弘	東京都	小西 憲一	香川県	香川大学	高嶋 良子	香川県	四国大学大学院
井澤 秀彦	東京都	法政大学	加藤 祐司	埼玉県	小林 比出代	長野県	信州大学	高橋 克匡	埼玉県	県立深谷第一高等学校
石井 健	埼玉県	東京学芸大学	香取 潤哉	茨城県	小林 恵	神奈川県	青島社	鷹啄 知美	埼玉県	埼玉県
石橋 隆文	東京都	東京地方検察庁	金子 章乃	東京都	小林 祐太	群馬県	県立前橋商業高等学校	高橋 美穂子	神奈川県	神奈川大学
伊豆名 皓美	新潟県	新潟大学大学院	金子 馨	神奈川県	駒瀬 公哉	岐阜県	県立岐阜城北高等学校	滝口 雅弘	京都府	京都府
井田 明宏	広島県	安田女子大学	蒲池 真純	埼玉県	齋藤 瞬一	埼玉県	大東文化大学	竹嶋 秀聡	三重県	近畿大学工業高等専門学校
板橋 聡美	東京都	昭和女子大学	亀田 絵里香	埼玉県	齋藤 久美	千葉県	茨城大学	竹之内 裕章	佐賀県	佐賀大学名誉教授
伊藤 亜美	埼玉県	跡見学園女子大学	萱 のり子	奈良県	齋藤 颯	群馬県	前橋市教育委員会	立石 充	徳島県	徳島県立文学書道館
伊藤 彩里沙	群馬県	富岡市立北中学校	萱 晋	東京都	齋藤 英男	埼玉県	武蔵野学院大学	田中 有紗	東京都	東京学芸大学大学院
今井 京子	群馬県	前橋市立桃井小学校	河合 信代	東京都	坂井 昭彦	新潟県	新潟県教育委員会	田中 春菜	埼玉県	大東文化大学院博士課程
今井 裕登	群馬県	前橋市立粕川小学校	河内 由弥	東京都	佐藤 有紗	千葉県	県立千葉高等学校	田中 秀征	徳島県	県立小松島高等学校
岩原 優花	群馬県	県立前橋高等特別支援学校	川内 佑毅	東京都	佐藤 有紗	千葉県	早稲田大学高等学校	谷口 邦彦	広島県	安田女子大学
上野 あゆみ	福岡県	(株)佐電工	川内 佑毅	東京都	佐藤 有紗	千葉県	早稲田大学高等学校	谷橋 由花	北海道	四国大学
内門 亮子	東京都	専修大学	河内 利治	東京都	佐藤 法雄	東京都	書宗院	田ノ岡 大雄	徳島県	都留文科大
内山 裕美	東京都	早稲田大学	河内 利治	東京都	佐藤 法雄	東京都	大東文化大学書道研究所	田畑 理恵	東京都	都留文科大
浦野 俊則	埼玉県	千葉大学・植草学園大学名誉教授	河内 利治	東京都	佐藤 法雄	東京都	大東文化大学書道研究所	田畑 理恵	東京都	都留文科大
王 国強	栃木県	宇都宮大学大学院博士課程	河内 利治	東京都	佐藤 法雄	東京都	大東文化大学書道研究所	田畑 理恵	東京都	都留文科大
大島 史子	群馬県	利根沼田学校組合立利根商業高等学校	河内 利治	東京都	佐藤 法雄	東京都	大東文化大学書道研究所	田畑 理恵	東京都	都留文科大
大島 剛	徳島県	四国大学	河内 利治	東京都	佐藤 法雄	東京都	大東文化大学書道研究所	田畑 理恵	東京都	都留文科大
太田 知美	北海道	北海道札幌平岸高等学校	河内 利治	東京都	佐藤 法雄	東京都	大東文化大学書道研究所	田畑 理恵	東京都	都留文科大

第一回国際学術交流（台湾）開催前報告

国際学術専門交流委員会

二〇二五年三月末に、台北において、全国大学書道学会、国立台湾芸術大学を主催者とし、中華民国篆刻協会、中華民国書道教育協会の共催とする国際学術交流を開催することになりました。そこで、この半年余り、日台の諸機関と調整を行いながら、二〇二四年一月七日（土）開催の国際学術専門交流委員会において、書法シンポジウム及び書法展に関して審議・報告が行われましたので、会員の皆様にも報告したいと思います。

まず、日本側のシンポジウム発表者については、横田恭三（本会会長）、永由徳夫（本会理事長）、下田章平（本会常任理事）、柳田さやか（本会常任理事）の四名を決定しました。シンポジウムは、逐次通訳の形で行われる予定です。また、シンポジウム発表者四名に加え、草津祐介（本会常任理事）、藤森大雅（本会理事）、関俊史（本会理事）、早川桂央（本会理事）の四名を、論文誌上発表者として決定いたしました。誌上发表論文は日本語ですが、要旨のみ中文訳が行われ、論文集は当日の参加者に配付される予定です。

台湾での書作展に関しては、以前お知らせした通り、本年度の福岡大会の作品をそのまま台湾側へ送付して行われます。同時に作品集の制作も台湾側で行われ、出品者の履歴、肖像写真、作品寸法、制作時期、そして台湾側で撮影された作品写真を掲載した作品集を目下製作中です。展覧会終了後に、作品は日本に搬出して福岡教育大学に寄贈され、作品出品者には本会事務局から作品集が送付されることになっております（無料）。

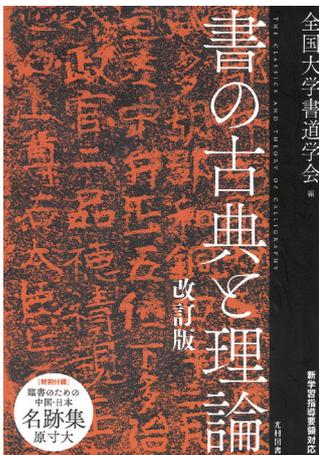
台湾研修旅行には、約二〇名の会員が参加する予定であり、研修は以下の日程で実施する運びとなっております。旅行団で参加される会員のもとには、出発の一ヶ月前になりましたら、旅行会社より、入金等の手続き書類が届く予定でありますので、もうしばらくお待ちください。

三月二十七日 羽田空港発（午前）、松山（台北）空港着。何創時書法芸術基金会にて特別閲覧。蕙風堂でお買い物。

三月二十八日 午前、国立故宫博物院見学。午後、台湾芸術大学にて書法展開幕式、その後交流会（祝宴）

三月二十九日 台湾芸術大学にて一日シンポジウム、書法展鑑賞。

三月三〇日 午前、中央研究院歴史語言研究所歴史文物陳列館見学。午後、免税店を経て松山（台北）空港発、羽田空港着、解散。



『書の古典と理論 改訂版』第三版出来！

全国大学書道学会 編

定価：2,200円

A4判、184ページ、四色刷り／ISBN978-4-8138-0266-2

「古典編」「理論編」「資料編」の3編で構成された「書」の総合テキスト。オールカラーで、新学習指導要領にも完全対応。巻末に切り離し可能な原寸大の「臨書のための中国・日本名跡集」を添付。

お求めは全国の書店またはオンライン書店から。

『大学書道研究』の投稿規程、執筆要領について

(学術局)

1 改定の趣旨

このたび学術局では、『大学書道研究』の内容充実と査読の公正化、投稿論文の質的向上を計るために、『大学書道研究』の投稿規程を新設し、執筆要領を改定しました。

近時、『大学書道研究』では、少子化や大学を取り巻く環境が大きく変化したことにより、投稿者数が減少し、本誌の継続性が課題となっております。掲載論文の水準を維持しながらも、多くの方に論文以外の原稿を投稿する機会を確保し、本学会会員にとって魅力的な雑誌になればと考えております。

新しい投稿規程・執筆要領に関しましては、一部を以下で紹介するとともに、全文を本学会ホームページに掲載し (<https://all-shodo.jp/manage/wp-content/uploads/2024/09/240927.pdf>)、『大学書道研究』第18号(2025年8月刊行予定)より適用します。ご熟読の上、原稿を投稿頂きますよう、よろしく申し上げます。会員のみみなさまの積極的な原稿の投稿をお待ちしております。

2 投稿規程の新設

これまで本誌には「投稿規程」がありませんでしたので新たに設定しました。今後は、「論文」(審査の結果「研究ノート」になる場合があります)に加え、書評、翻刻、寄稿等の「その他の原稿」を広く募集して紙面を充実させていきます。

また、各種原稿の締切日について、これまででは、11月締切日、3月刊行の予定でありましたが、今後は「2月第1月曜日(必着)」を締切日とし、8月の刊行を目指します。執筆者の原稿執筆のための時間を大幅に確保し、かつ公正な査読を実施するための適正な工程にするためです。

3 執筆要領の改訂

これまで本誌には「執筆要領」を掲載してきましたが、それは論文を作成するための「様式」を提示したものであり、実質的な「執筆要領」は設定されておりましたので、他学会に準じた「執筆要領」を設定しました。

4 その他

このほかに、査読規程に関しましても、査読の公正を図るために改定しました。また、「全国大学書道学会規約」にある「学会誌発行・編集に関する内規」は、新たな「投稿規程」「執筆要領」「査読規程」と重複しますので廃止とします。

本誌に掲載されておりました「執筆要領」「様式」については、今後本学会ホームページ上に掲載しますので、ご利用ください。また、他学会にならって、「査読規程」は非公開とします。ただし、査読判定基準は投稿規程に記してありますので、御覧の上ご執筆ください。

※「投稿規程」「執筆要領」の詳細は、全国大学書道学会ウェブサイト (<https://all-shodo.jp>) をご参照ください。

「投稿規程」「執筆要領」はQRコードを読み取っていただくと見ることもできます。



福岡教育大学所蔵の金石書画碑法帖紹介 — 中林梧竹「蔵春」扁額 —

福岡教育大学 服部 一 啓

令和六年度全国大学書道学会の担当校として、会員の皆様にお越しいただくにあたり、横田会長、永由理事長、事務局にご相談申し上げたところ、記念講演に寄せた企画展示を実施すると面白いねということに相成りました。そこで会員書作展の会場の一部を使用して、本学収蔵の中から中国書人の書跡を鑑賞いただく特別展示を実施した次第です。出陳は以下の七点といたしました。

王鐸 (1592～1652)	臨晋王凝之尺牘長條軸	256・5×51・5 cm	上田桑鳩旧蔵
陳介祺 (1813～1884)	石鼎得句	86・5×48・0 cm	68歳作
俞樾 (1821～1907)	隸書四屏	各146・5×39・0 cm	四聯幅 67歳作
楊守敬 (1840～1915)	行書五言對幅	各110・0×39・5 cm	對幅 68歳作
羅振玉 (1866～1940)	金文銘 臨楊簋	31・8×38・5 cm	59歳作
王禔 (1880～1960)	隸書對幅	各130・5×32・5 cm	對幅 69歳作
鄧散木 (1898～1963)	金文五行書 臨中方鼎	77・0×32・0 cm	

まず、本学はこれまでに地域貢献として、門司書作家協会二十周年記念「中国明清書画展」(平成二年七月)、北九州市制三十五周年記念「近代日本の書」(平成十年三月)などに収蔵品を貸出し、各図録に作品掲載された記録が残されています。さて、本学書道分野のシンボルである中林梧竹書「蔵春」をご紹介します。

中林梧竹「蔵春」 縦53・0×横180・5 cm

蔵春

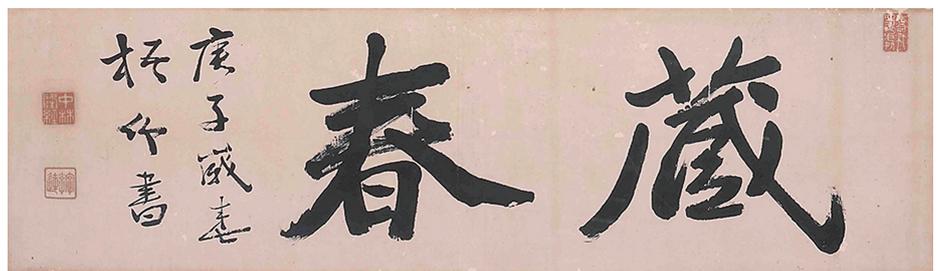
庚子歳春 梧竹書

「蔵春」の二字を大書し、款記二行に各々、「庚子歳春」と「梧竹書」を配した、梧竹七四歳の堂々たる大扁額です。大字はその意「春陽の気を含みたくわえる」を表出するように、朗らかでじつくりと落ち着いた情感豊かな書きぶりです。落款は冴えた線質で作品全体にひと際

明るさを印象づけています。本作からは、高い風格や気品、書のもつ美や崇高さをあらためて考えさせられます。

書道演習室に掲げてあり、福岡教育大学書道科同窓会「蔵春会」呼称の由来です。本学は昭和二四年に福岡学芸大学として発足し、書道分野は昭和三七年に東京学芸大学、奈良教育大学に次いで設置された国立大学書道科の一つです。書道科一期生の方によれば、当時の主任であった横田直次(号小竹・不生)教官の収蔵品で、田川分校から大橋校舎(福岡市)、そして昭和四〇年九月に移転統合した赤間キャンパス(現・宗像市)へと「蔵春」扁額は辿ってきたとのこと。移転時の引越越しの際には、机などとともにトラックに積み込み、真新しい書道演習室と一緒に来たんだとご教示いただきました。

作品伝来についての委細は不詳ですが、佐賀有田の豪商・久富家の屋号「蔵春亭」は、佐賀鍋島藩十代藩主鍋島直正から与えられました。その久富家には文化人との交流を示す品が多く伝わっています。梧竹は、本作が成った七四歳春頃に故郷小城に滞留しています。明治有田を代表する商家との交流に加えて、梧竹と佐賀藩の支藩小城十一代藩主鍋島直虎(直正の七男)との関連性からも揮毫の依頼があったのではと推測されています。



中林梧竹「蔵春」



王鐸「臨晋王凝之尺牘長條幅」